



石井 久子 教授

【いしい ひさこ】

慶応義塾大学を卒業後、日本 IBM 株式会社勤務を経て、コロンビア大学大学院に留学。最近フランス製の圧力鍋を購入した。このお鍋で料理すると時間を短縮できるが、煮込み料理はじっくり時間をかけた方がやはり美味しいようだ。学ぶことにも近道はなさそうだ。

- 労働経済学 I・II
- 国際雇用論 I

労働市場について学ぼう

その昔、ニューヨークにあるコロンビア大学院に留学した。その当時、大学のゼミの指導教官、従兄弟、そしてIBMに勤務していたときの上司もニューヨークに在住していたので、それはとても快適な海外生活であった。

あるセミナーで、Gary BeckerのHuman Capitalを精読する機会を得た。その本からある種の衝撃を受けたことを今でもはっきりと記憶している。後にGary Beckerは経済の分野でノーベル賞を授与された。この本がきっかけで、人的資本の視点から労働市場を分析することにとなる。

初めは、企業規模間におけるキャリア形成の違いに注目して分析に着手した。その後、男女間のキャリア形成や処遇の違い、若年雇用、最低賃金や失業について、分析の対象を広げていった。昨年、オーストラリア国立大学との共同研究において、"The changing role of skill, wages, employment and education in the Japanese labour market, 1985-2005"を発表した。

現在は、失業における男女間の違いに着目している。国際比較で見ると、女性の失業率のほうが男性より高いのが一般的だ。ところが、アメリカでは1980年代に、男性の失業率が女性より高くなる傾向がみられた。その理由として、景気に敏感な製造業において男性がより多く働いていることがまず理由として挙げられた。それから、サービス業において雇用が力強く創造され、また特に不況に強い分野における女性の就業が伸びたからだそうだ。ところが、1990年代の不況では、また女性の失業率が男性より高くなった。

その理由の一つとして、人材派遣の分野での不況が深刻で、女性とその影響を強く受けたという。アメリカでもお正月に派遣村が出現したのだろうか。

講義では、労働経済学と国際雇用論を担当している。労働経済学ではミクロ・マクロ経済学の視点から雇用を分析して、日本の労働市場の現状を理解することを目的としている。国際雇用論では、世界の労働市場と日本の労働市場を比較検討することから、日本の雇用について理解を深めることを目的としている。

ゼミでは2年の後期は経済学の基礎を学び、3年の1年間は英語のテキストを使い学習しました。初めは、英語で経済を勉強することはとても難しいように思われましたが、3年の後期になると英文にも慣れ、英語と経済の実力がついてきたことを実感できるようになりました。石井久子ゼミは英語と経済を真剣に勉強をしたい人にお勧めです。

石井ゼミ11期生 斎藤 正志

ゼミ生のひとこと

